

基礎看護学実習前の技術学習方法の検討

佐藤 美紀, 大津 廣子, 籠 玲子, 川島 良子, 小松万喜子, 曾田 陽子, 西尾亜理砂

Consideration of the Nursing Arts Practice Method before practice in Fundamentals of Nursing

Miki Sato, Hiroko Otsu, Reiko Kago, Ryoko Kawashima,
Makiko Komatsu, Yoko Sota, Arisa Nishio

【目的】基礎看護学実習前の技術学習方法として、紙上事例を用いた技術学習を取り入れ、その効果を検討するために学生の看護技術の到達度および不安の変化を明らかにする。

【方法】平成23年度基礎看護学実習の履修者を対象に技術学習のための2事例を提示し、生活援助技術26項目の練習状況と到達度、実習に対する不安、実習前の事例による練習が実習中に役立ったかについて質問紙調査を行った。

【結果】有効回答88名のうち84名が技術学習を行い、74名は事例を用いて練習していた。練習前後の到達度に有意差があった技術は13項目であった。事例を用いたか否かによる練習後の到達度に差はなかったが、事例による練習は実習中に患者の個性を考えた援助をすること等に役立っていた。不安は練習後に有意に軽減した項目が多く、本取組みは技術到達度を上げ、不安を軽減できていると評価できた。

キーワード：看護技術練習、基礎看護学実習、看護学生、技術到達度、実習前の不安

I. 序 論

臨地実習は、学内で学んだ知識・技術を臨地で実践することを通して学ぶ貴重な学習の場であり、看護師免許取得のために欠かせないものである。また、昨今は看護基礎教育の期間で一定の実践能力を身につけることが求められており、臨地実習で受持ち患者の個性を把握し援助する経験がより重要になっている。一方で、無資格者による実践であることから、実習までの十分な学習により実施する援助のレベルを保証する必要がある¹⁾²⁾。また、臨地実習前には学生はさまざまな不安を抱えている事が示されており³⁾⁶⁾、不安が低いほど計画立案と技術の実施、および総合成績が高いという報告もある⁷⁾。不安や緊張は適度であれば学習意欲につながり自己を高めることができるが、強すぎると思考や行動がまとまらず失敗につながり、さらに不安・緊張を高めるという悪循環を招くと考える。

そのため、我々は実習が効果的な学習の場となるよう指導内容・方法を検討するとともに、実習前のオリエンテーションの工夫や学習環境の改善などを行い、基礎看護学実習に臨む学生が十分学習でき、不安や緊張が軽減するよう整備してきた。特に、基礎看護学実習は2年次10月に開講するが、実習で実施する生活援助技術の学習は1年次後期に行われ、基礎看護学実習まで期間が空くこと、実習前に夏季休業があり実習準備は学生の自己学習に委ねられることから、学生の主体的な技術練習を促す必要がある。また、基礎看護学実習では受持ち患者の状態に合わせて援助を計画し実施することを目標としているため、患者の個性に応じた計画立案や援助の練習を進める必要がある。それらの状況から、個性を考えた様々な技術の復習および練習ができるように、2年前に紙上事例を作成し活用を促すと同時に、オリエンテーションでの説明方法や事前学習への教員の関わり方などを改善してきた。今回は、その基礎看護学実習前の技術学習を促す取組みを実習前の学生の看護技術の到達

度および不安の変化から評価し、今後の技術学習方法を検討する目的で調査を行った。

II. 研究目的

基礎看護学実習前の技術学習方法を検討するために、実習前の技術学習による技術到達度および不安の変化を明らかにする。

III. 方法

1. 対象

平成23年度に本学の基礎看護学実習を履修し、本研究の主旨を理解し研究協力に同意した90名を対象とした。

2. 実習前の技術学習の方法

1) 基礎看護学実習までの技術学習の流れ (図1)

実習オリエンテーションを夏季休業に入る前の7月下旬に行い、実習方法と実習までの学習の仕方について説明した。技術学習に用いる事例は、配付資料を用いて紹介し、その活用方法、実習室での練習方法についても説明した。その際、自己学習前の看護技術の到達度を自己評価してもらい、技術学習の動機づけを図った。

学生は夏季休業中から9月末の実習オリエンテーションまでの間、実習室を利用して技術学習を行った。夏季

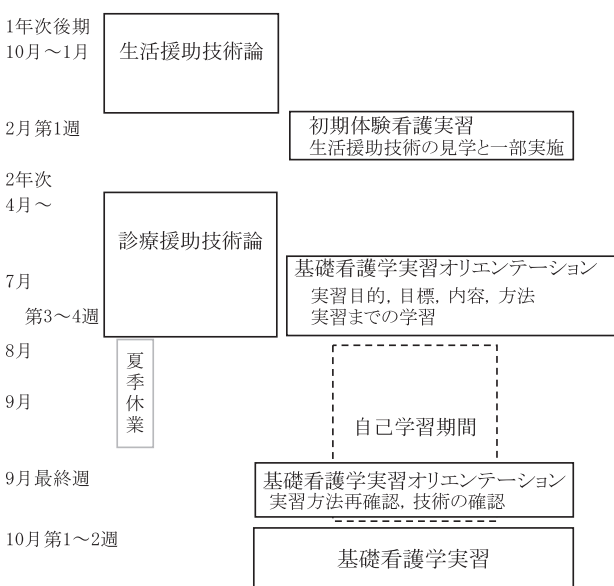


図1 基礎看護学実習までの技術学習の流れ

休業中の教員の指導は、学生の実施状況を確認するとともに、実習室にて直接技術指導を実施する体制をとった。

2) 技術学習に用いた事例

事例は消化器手術を受ける片麻痺の高齢患者と心不全で労作性の呼吸困難を生じることがある中年期患者の2事例とし、患者の状況描写やエピソード、患者の発言などを盛り込み、その時々でどのような援助が必要か考えて実施できる内容とした。また、事例に取り組むことで、学習した生活援助技術が復習できるようにした。

3. 調査方法

先行研究を参考に独自に作成した自記式質問紙を実習オリエンテーションで配付し、基礎看護学実習後に回収した。

4. 調査内容

生活援助技術26項目に対して、事例を用いた練習回数と事例を用いない練習回数の記載を求めた。各技術の到達度は「4:1人でできる」から「1:支援がかなりあってもできない」の4段階評定とした。また、技術練習が実習中に役立ったと思うかを4段階評定とし、役立った理由あるいは役立たなかった理由には多肢選択法を用いた。

実習前に学生が感じる不安については、先行研究³⁾⁻⁹⁾を参考に、知識・技術、援助の実施に関する事、患者や看護師・教員との関わりに関する事などの27項目について、「5:非常にそう思う」から「1:まったくそう思わない」の5段階評定とした。

5. 分析方法

各技術についての練習状況の回答から、事例を用いた練習をした者(以下、事例練習群)と事例を使用せず基本的な練習のみの者(以下、基本練習群)、事例での練習も基本的な練習もしていない者(以下、練習なし群)に分け、それぞれの練習状況と到達度を集計した。各技術の到達度について、7月のオリエンテーション時(以下、練習前)と9月末の実習直前(以下、練習後)のデータを用いて、Wilcoxonの符号付順位検定を用いて比較した。また、練習後の事例練習群と基本練習群の到達度をMann-WhitneyのU検定で比較した。

事例練習群の実習に役立ったかの回答は単純集計し、実習前の不安については練習前後の比較を対応のある

t検定で行った。基本練習群の不安についてはWilcoxonの符号付順位検定を用いて練習前後で比較した。

統計処理は、IBM SPSS Statistics 20を用いて行った。

6. 倫理的手続

愛知県立大学研究倫理審査委員会の承認を得て実施した。学生に対して、7月の実習オリエンテーション時に、紙上事例を用いた技術学習については、実習前の学習の一環として実施するよう説明し、到達度や練習状況の記録を教員が学生指導に活用することを説明した。その上で技術学習の効果を検討するための研究協力依頼、すなわち到達度や練習状況を記録する調査票を研究に使用することの依頼を文書と口頭で行った。さらに、研究参加の同意は自由意思によること、同意書は実習終了後に所定の封筒に封緘して提出してもらい成績確定後に開封して確認するため研究参加の有無が成績に影響しないこと、匿名性を保持することを口頭および書面で説明した。

IV. 結 果

練習状況、技術到達度、不安について回答に不備のあった2名分を除く88名分の調査票を有効回答として分析した。

1. 実習前の技術練習の状況

生活援助技術26項目中1項目以上で事例を用いて練習した学生は74名(84.1%)で、練習に事例を用いなかった学生は10名(11.4%)、どの技術も練習をしなかった者は4名(4.5%)であった。

各技術についての練習状況を表1に示す。

半数以上の学生が事例を用いて練習した技術は「臥床患者の寝衣交換」「臥床患者のシーツ交換」「おむつ交換」「ベッドから車椅子への移乗」であった。「バイタルサインズの観察、測定」「ベッドメイキング」は事例を用いない基本的な練習を半数以上の学生が実施していた。

練習回数が多かった技術は、事例練習群では「バイタルサインズの観察、測定」「臥床患者の寝衣交換」「おむつ交換」「ベッドから車椅子への移乗」「ベッドメイキング」「臥床患者のシーツ交換」「陰部洗浄」で、いずれも平均3.0回以上であった。基本練習群の各技術の練習回数は平均3回未満であった。

2. 技術練習前後の技術到達度

練習前後の調査に回答が得られた者を対象に、10名以上の練習者がみられた技術18項目の技術到達度を図2に示す。

「臥床患者のシーツ交換」「おむつ交換」「車椅子による移送」「陰部洗浄」「床上排泄の介助(便器)」「洗髪(ケリーパッド)」は、事例練習群、基本練習群ともに練習前後の到達度に有意差があった($p < 0.05$)。

「ベッドから車椅子への移乗」「清拭」「足浴」については、事例練習群で練習前後の到達度に有意差があった($p < 0.05$)。

「ベッドメイキング」「冷罨法」「温罨法」「洗髪(洗髪車)」については、基本練習群で練習前後の到達度に有意差があった($p < 0.05$)。

各技術において、練習後の到達度について事例練習群と基本練習群に差はなかった。

3. 技術練習の実習への影響

基礎看護学実習後に事例練習群から得た、事例を用いて練習したことが実習で役立ったかとその理由についての回答を表2、表3に示す。

「役立った」「まあまあ役立った」と回答した学生は72.9%で、その理由として「技術の注意点を確認できた」「技術を練習できた」「個別性を考えることが理解できた」が半数以上であった。

「役立たなかった」と回答した者はいなかったが、「あまり役立たなかった」は17名であった。その理由としては「学内と臨床での方法が異なり実習で戸惑った」が約半数であり、次いで「基本的な練習を重視して事例での練習が行えなかった」「受持ち患者とは異なった状況だった」「受持ち患者に練習したことをそのまま実施することはできなかった」であった。

4. 技術練習前後の不安

練習前後の調査に回答が得られた86名の不安の状況を表4に示す。

「自分の知識」「自分の技術」「患者に受け入れてもらえるか」「看護過程が展開できるか」については、事例練習群、基本練習群、練習なし群の練習前後とも平均得点4.0点以上と不安が高かった。

練習前後の比較では、事例練習群で知識・技術、援助の実施に対する不安の14項目中10項目、患者や指導者等との関わりについての不安の10項目中5項目、その他の

表1 各技術の練習状況 (n=88)

技術項目	事例練習群					基本練習群					練習なし群 人
	人	練習回数				人	練習回数				
		最小値	最大値	平均値	標準偏差		最小値	最大値	平均値	標準偏差	
臥床患者の寝衣交換	57	1	13	4.1	2.2	16	1	8	2.8	1.7	15
臥床患者のシーツ交換	52	1	11	3.1	1.7	28	1	10	2.1	1.8	8
おむつ交換	47	1	10	3.7	2.0	27	1	6	2.3	1.2	14
ベッドから車椅子への移乗	46	1	11	3.5	2.3	26	1	6	2.0	1.4	16
バイタルサインズの観察, 測定	39	1	22	4.3	3.3	44	1	8	2.5	1.5	5
車椅子による移送	30	1	7	2.3	1.4	38	1	4	1.6	0.7	20
陰部洗浄	29	1	7	3.1	1.5	38	1	10	2.0	1.8	21
清拭	26	1	10	2.8	1.9	25	1	3	1.2	0.5	37
足浴	22	1	4	1.7	0.8	35	1	3	1.2	0.5	31
臥床患者の体位変換	22	1	6	2.3	1.3	13	1	4	1.7	1.0	53
ベッドメイキング	16	2	7	3.4	1.3	63	1	5	2.2	1.1	9
床上排泄の介助 (便器)	13	1	3	2.1	0.6	19	1	2	1.1	0.2	56
入浴, シャワー浴の介助	9	1	3	2.8	0.7	0					79
洗髪 (ケリーパッド)	7	1	2	1.1	0.4	29	1	2	1.1	0.4	52
病室環境の整備	5	1	3	1.8	0.8	13	1	3	1.2	0.6	70
床上排泄の介助 (尿器)	4	1	3	1.8	1.0	16	1	2	1.1	0.3	68
食事介助	3	2	3	2.7	0.6	6	1	1	1.0	0.0	79
口腔ケア	3	1	2	1.3	0.6	5	1	2	1.2	0.4	80
冷巻法	2	2	3	2.5	0.7	22	1	2	1.0	0.2	64
温巻法	2	1	2	1.5	0.7	20	1	1	1.0	0.0	66
食事環境の設定	2	3	3	3.0	0.0	4	1	1	1.0	0.0	82
洗髪 (洗髪車)	1	1	1	1.0	0.0	11	1	2	1.1	0.3	76
歩行・移動の介助	0					3	1	1	1.0	0.0	85
手浴	0					2	1	1	1.0	0.0	86
ベッドからストレッチャーへの移乗	0					1	1	1	1.0	0.0	87
ストレッチャーによる移送	0					0					88

3項目で有意に平均得点が低くなっていた ($p<0.05$). 逆に平均得点が練習後に有意に高くなっていたのは「教員や看護師に質問できるか」であった。

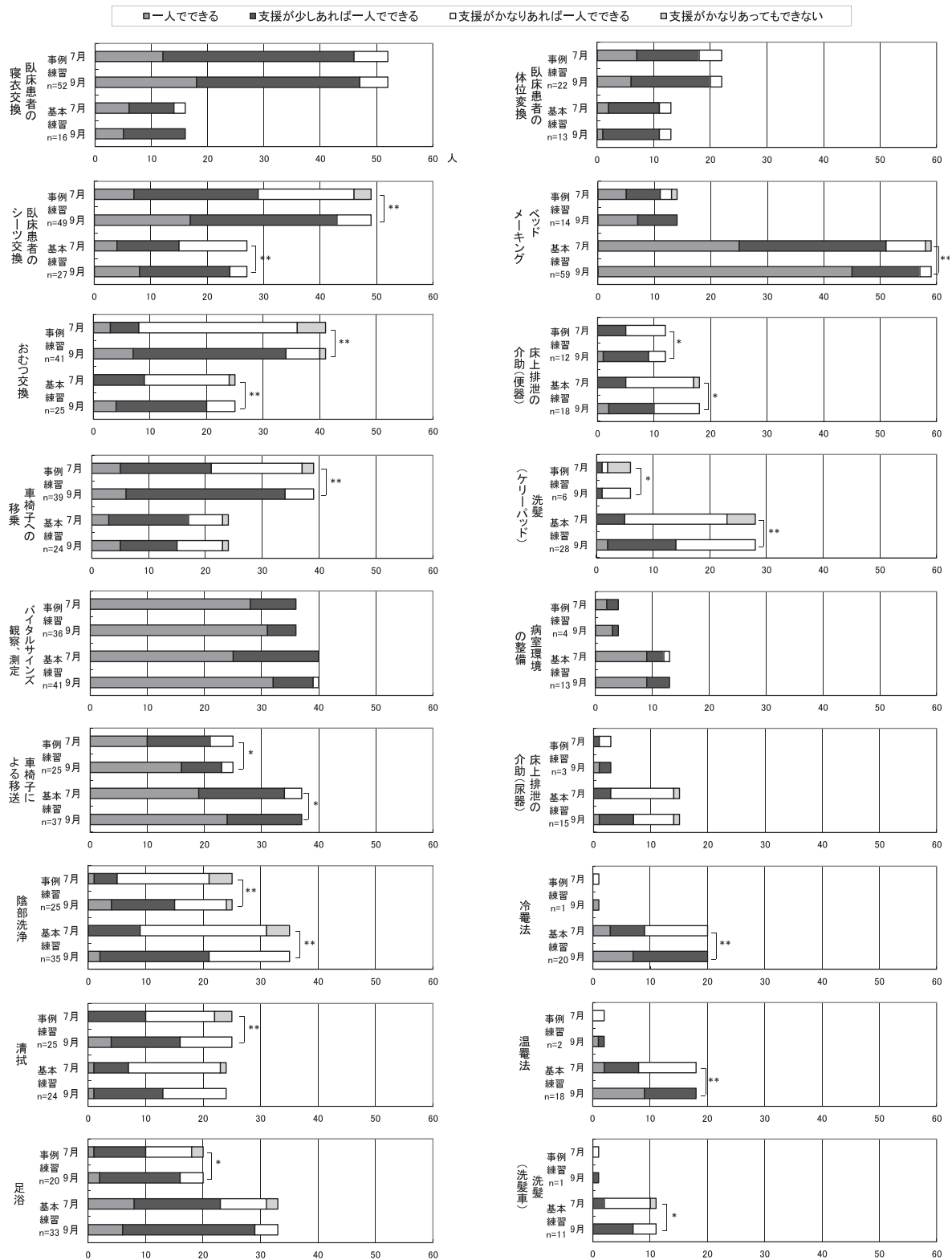
基本練習群の練習前後の比較では、「自分は何もできないかもしれない」「患者に嫌われないか」が練習後に有意に高くなっていた ($p<0.05$).

V. 考 察

初めて臨地実習を体験する学生は、技術の実施に対する不安や患者や看護師とのコミュニケーションに対する不安など多くの不安を抱えている。そこで、基礎看護学

実習前に学内で看護技術の自己練習を実施することで、学生が実習に対する不安を和らげ自信を持って実習に臨めるのではないかと考え、オリエンテーションでの動機づけや夏季休業中の技術指導を行った。その働きかけや指導の方法について、今回の調査結果から考察する。

7月の実習オリエンテーション時の不安が知識・技術、援助の実施について高く、88名中84名が技術練習をしていた。これは、オリエンテーションを受けた学生が実習目標と具体的な実習方法を理解し、生活援助技術の自己評価をしたことで、自分の知識・技術に不安を覚え、技術練習の必要性を認識した結果と考えられる。このことから、実習オリエンテーションで技術練習の動機づけが



Wilcoxon の符号付順位検定 (*p < 0.05, **p < 0.01)

図2 練習状況別の技術の到達度変化

図れたと考える。そして事例練習群では不安27項目中18項目の平均得点が有意に下がったことから、事例を用いた練習の有効性が示唆された。

練習後の学生の技術の到達度は、多くの技術で練習前より向上していた。実習で必ず実施する「バイタルサインの観察、測定」「ベッドメイキング」の練習者は多く、また到達度も高かった。練習者の内訳として基本練習群が多かったのは、これらの技術が患者の状態によって方

法があまり変わらないためと思われる。「車椅子による移送」や「温罨法」「冷罨法」も基本練習群が多く、学生はどの技術で事例を用いて練習すべきか考えて実施していると考えられる。一方で、事例によって実施手順や方法が変わる「陰部洗浄」や「足浴」「洗髪」についても基本練習群の人数が多い結果であった。これらの技術の学内実習は、「陰部洗浄」は2人一組で実施、「洗髪」は洗髪車もしくはケリーパッドを用いた方法で実施しているため、基本的な手順の習得が必要と考える学生が多いためと考える。そして時間的な限界により事例活用まではできなかった可能性がある。我々は事例を用いた技術練習によって、基本的な手順の確認と個別性への配慮が同時にできると考え、事例を用いた練習を勧めているが、学生の練習状況を見ると、まず学内実習で学習した方法を復習し、次に事例を用いた練習をするという段階をおった練習計画を立てていることがわかった。これらのことから、血圧測定、ベッドメイキングのように基本的

表2 事例を用いた技術練習が役立ったか (n=74)

	人	%
役立った	24	32.4
まあまあ役立った	30	40.5
あまり役立たなかった	17	23.0
役立たなかった	0	0.0
無回答	3	4.1
合計	74	100.0

表3-1 役立った、まあまあ役立ったの理由 (複数回答)

理 由	人
各援助技術の注意点を確認できた	47
技術を練習できた	46
個別性を考えることが理解できた	41
事例の具体的な状況に合わせた看護ができた	33
観察点を考えることに役立った	32
事前に準備から方法まで確認できた	27
実習に対する不安が少なくなった	19
実習前に援助計画を考えることができた	10
受持ち患者に援助を実施する際に事例に対して練習した方法が役立った	8
事例があることでコミュニケーションをとりながら実施する練習になった	6
事例の状況を踏まえた患者の心理が理解できた	5
受持ち患者と事例の状況が似ていて援助を考える際に役だった	4
その他	
・自立度が高すぎて、事例を使って練習したことをあまり生かせなかった	1

表3-2 あまり役立たなかった、役立たなかったの理由 (複数回答)

理 由	人
学校での学習内容と臨床の援助方法が異なり実習ではとまどった	8
技術の基本的な練習を重視して事例での練習が行えなかった	7
受持ち患者とは異なった状況だった	7
受持ち患者には練習したことをそのまま実施することはできなかった	6
コミュニケーションの取り方が実際にはできなかった	6
練習しても実習に対する不安は変わらなかった	6
事例があっても学生同士では切り切れなかった	5
自分の考えた方法が正しいかわからなかった	5
事例があまりイメージできず、うまく練習できなかった	3
事例を練習する時間がなかった	2
事例に対する援助を練習するという方法がわからなかった	1

表4 実習に対する不安の変化

実習に対する不安 注1		事例練習群 (n=72) (設問3,9,22,24,26はn=71)					基本練習群 (n=10)					練習なし群 (n=4)			
		練習前		練習後		前後比較 注2	練習前		練習後		前後比較 注3	練習前		練習後	
		平均	標準偏差	平均	標準偏差		平均	標準偏差	平均	標準偏差		平均	標準偏差	平均	標準偏差
知識・技術、 援助の実施に対する不安	1	4.5	0.7	4.3	0.7	*	4.3	0.7	4.3	0.7		4.8	0.5	4.5	0.6
	†2	4.5	0.5	4.2	0.6	*	4.4	0.5	4.3	0.5		4.3	0.5	4.3	0.5
	†3	4.5	0.8	4.2	0.9	*	4.1	1.2	3.7	1.3		3.8	1.9	4.3	0.5
	4	4.4	0.7	4.2	0.8	*	3.8	0.6	4.0	0.8		3.5	0.6	3.8	0.5
	5	4.3	0.7	4.0	0.8	*	3.9	0.9	3.9	0.9		4.5	1.0	4.3	1.0
	6	4.2	0.7	3.9	0.8	*	3.8	0.6	4.0	0.8		4.0	0.0	3.8	0.5
	7	4.2	0.8	4.1	0.8		3.8	0.8	4.1	0.9		3.3	1.3	3.5	0.6
	8	4.1	0.8	4.0	0.9		3.6	0.7	3.9	1.0		4.0	0.8	4.3	1.0
	9	4.1	0.7	4.0	0.8		3.7	0.9	3.8	0.8		4.3	1.0	4.5	0.6
	10	3.9	0.8	3.7	0.8	*	3.8	1.0	3.9	1.0		4.0	1.4	4.0	1.4
	11	3.9	0.9	3.5	1.0	*	3.3	0.9	3.9	1.0	*	3.5	0.6	3.8	1.0
	†12	3.8	0.7	3.7	0.8	*	3.9	0.6	3.3	0.9		4.0	0.0	3.5	0.6
	13	3.7	0.9	3.6	1.0		3.7	0.7	3.7	0.9		3.3	1.0	3.3	1.0
	†14	3.6	0.6	3.3	0.6	*	3.6	0.5	3.2	0.4		3.0	0.8	3.5	0.6
患者や指導者等との関わりについての不安	†15	4.2	0.6	4.1	0.6		4.0	0.7	4.1	0.7		4.0	1.2	4.3	1.0
	†16	3.8	0.8	3.6	0.8	*	4.0	0.5	4.0	0.8		3.8	0.5	4.0	0.8
	17	3.7	1.0	3.4	0.9	*	3.0	0.9	3.5	1.0		3.5	1.3	3.5	1.3
	18	3.6	1.0	3.5	1.0		3.0	1.2	3.6	1.2	*	3.5	1.3	2.5	0.6
	†19	3.5	0.9	3.3	0.9	*	3.4	0.8	3.4	0.8		3.3	0.5	3.0	0.8
	20	3.8	1.0	3.8	1.0		3.9	1.0	3.9	0.7		3.8	0.5	3.0	1.2
	21	3.5	1.0	3.3	1.0	*	3.5	1.1	3.3	1.1		3.0	1.2	3.0	1.2
	22	3.1	0.9	2.9	0.9	*	3.3	0.9	3.5	1.2		1.8	0.5	2.3	0.5
	†23	3.0	0.8	3.0	0.8		3.0	0.9	2.9	1.1		3.8	0.5	3.3	0.5
	†24	3.0	0.8	3.3	0.8	*	3.1	1.0	3.1	0.9		3.0	0.0	3.3	0.5
その他	25	2.4	1.0	2.2	1.0	*	3.2	1.4	2.8	1.2		1.8	0.5	2.5	1.7
	26	4.3	0.8	4.1	0.9	*	4.1	0.7	4.1	0.7		4.3	1.0	4.0	0.8
	†27	2.7	1.0	2.5	1.0	*	2.6	1.6	2.5	1.3		1.8	1.5	1.8	1.5

5段階評定 5：非常にそう思う ～ 1：まったくそう思わない で回答を得た。数値が高いほど不安が強いことを表す。

注1) 設問の†は逆転項目である

注2) 対応あるサンプルのt検定 *p<0.05

注3) Wilcoxonの符号付順位検定 *p<0.05

な手順の反復練習が有効な技術と、寝衣交換のように事例を用いて個別性を配慮して練習することが必要な技術を分けて提示した方が、事例を示すねらいを伝えることができ、学生は限られた時間で効率的な練習ができるのではないかと考える。また、今回練習者や練習回数が少なかったストレッチャーへの移乗・移送は、練習の際に4～5人程度の人数を要することから実習グループ単位で練習ができるような学習体制を整えていく必要があると考える。

今回、事例練習群と基本練習群で練習後の到達度には

差がなかった。これは、到達度の評価が「一人でできる」か、「指導者の支援があればできる」か、という内容であったため、事例使用による差が現れにくかった可能性がある。しかし、臨地実習後に事例を用いた練習が「実習で役立った・まあまあ役立った」と評価する学生は7割を超え、役立った理由として多くの学生が、個別性を考えることが理解できたことや、事例の具体的な状況に合わせた看護ができたなどを挙げていた。実習目標が「受持ち患者の状況に合った看護技術を指導を受けながら実施できる」であるため、学生は実習前の事例を用いた技術

練習が目標達成につながったと感じているのではないかと思われる。一方で、学内と臨床での方法の違い、事例と受持ち患者との違いから、練習したことが役立たなかったと感じる者もあり、また学生同士では患者になりきれないために患者への実践に練習が役立たないと感じる者もいた。実習前に事例での演習を導入している他大学でも同様に学生が演じる事例と実際の患者との違いに戸惑った学生の状況が報告されている¹⁰⁾。患者と関わった経験が少ない学生であるため、患者の動作や反応が観察できる視聴覚教材を紹介するなど、学生が患者を演じやすくする方策を講じ、また過去に学生が受け持った患者の状態を伝えるなどの工夫が必要と考える。実習病棟の事例での演習が実習意識を高めることも報告されており¹¹⁾、今後は学生が実習する病棟の入院患者の特徴を反映した事例を作成すると練習の動機づけも高まり、実習にも役立つ技術学習になるのではないかと考える。

以上のことから、実習病棟に合わせ、かつ個性に配慮が必要な技術を練習できる紙上事例を作成するとともに、学生が事例を十分イメージできるように教員が関わっていくことが今後の課題である。

VI. 結 論

基礎看護学実習前に紙上事例を用いた技術学習方法を取り入れ、オリエンテーションでの動機づけや技術指導を行った取組みを評価し、今後の課題を明らかにする目的で、学生の技術到達度および不安、実習に役立ったかどうかを調査した。

練習前の知識・技術に関する不安は高く、95%の学生が実習前の技術練習を行った。事例を用いて練習した学生の不安は27項目中18項目が練習後に有意に低下した。

練習後の到達度は事例を用いたか否かで差はなかったが、練習前後では事例使用の有無にかかわらず有意差が見られた技術が6項目、事例使用では3項目、基本練習では4項目で有意差が見られた。事例を用いた練習が実習に役立ったとした学生は7割を超えたが、事例と受持ち患者の違い等で役立っていないと感じる者もいた。

以上から本取組みで技術練習の動機づけができ、技術到達度の向上と不安の軽減がはかれると評価できた。今後は、事例を用いた練習がより効果的になるよう、実習病棟に合わせた事例を開発し、学生が患者の状態を十分イメージできるように関わるのが課題である。

謝 辞

本研究にご協力いただきました学生の皆様に厚くお礼申し上げます。

文 献

- 1) 厚生労働省：看護基礎教育における技術教育のあり方に関する検討会報告書。2003.
- 2) 厚生労働省：看護教育の内容と方法に関する検討会報告書。2011.
- 3) 山下タケ子：基礎看護実習に伴う不安に関する一考察。看護教育23(9)：562-567, 1982.
- 4) 阿部京子ほか：基礎看護実習に伴う不安内容の分析—質問紙、CAS不安診断検査を通して—。第21回日本看護学会集録(看護教育)：248-251, 1990.
- 5) 藤田美津子：初めて臨床実習を前にした看護学生の不安—学習への動機づけとして—。看護展望21(3)：386-396, 1996.
- 6) 大野木裕明ほか：看護実習不安の心理的構造と変化。看護教育37(1)：54-60, 1996.
- 7) 佐々木かほるほか：基礎看護学実習における学生の不安についての研究—成績と状態—特性不安尺度(STAI)による検討。群馬県立医療短期大学紀要3：19-24, 1996.
- 8) 山下満子ほか：臨地実習における学生の不安に関する研究(第2報)—基礎看護実習1と基礎看護実習2の実習前における不安内容の変化—。京都市立看護短期大学紀要26：11-18, 2001.
- 9) 近藤邦ほか：看護学生が実習前に感じる不安に関する研究—基礎看護実習と領域別実習との比較—。三育学院短期大学紀要34：11-25, 2006.
- 10) 青田正子ほか：高齢者を想定した基礎看護学実習前の演習効果について—アンケートの自由記載をKJ法で分析して—。滋賀医科大学看護学ジャーナル, 9(1)：59-62, 2011.
- 11) 関美奈子, 上田稚代子, 辻あさみ, 竹村節子, 畑野富美, 池田敬子, 坂本由希子, 土橋千鶴：成人看護学における臨地実習前演習の学習効果の検討。和歌山県立医科大学看護短期大学紀要5：45-54, 2002.